



Title	A Study on BA Imperative Conditional Construction in Japanese
Author(s)	瀬戸, 義隆
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/98642
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（瀬戸 義隆）	
論文題名	A Study on BA Imperative Conditional Construction in Japanese (日本語におけるバ命令条件構文に関する研究)
論文内容の要旨	
<p>本研究では、条件文の前件と後件が接続助詞によって接続され、後件に命令形述語が生起する形式を示す構文を命令条件構文として定義する。その下位構文として接続助詞として「バ」が生起する構文をバ命令条件構文 (BA imperative conditional construction)を位置付け、その振る舞いを共時的および通時的に用法基盤構文文法 (Usage-based Cognitive Construction Grammar) (Hoffman 2022) の枠組みから検討する。現代日本語におけるバ命令条件構文では、その従属節述語の語彙分布が限定的であることが先行研究では指摘されてきた。</p> <p>(1) a. もし、食べたければ、食べなさい。 b. *?読めば、ここに戻して下さい。</p> <p>(1ab) はいずれも、上で示したバ命令条件構文の形式的特徴を満たすが、その容認性に関しては差異があり、(1a) は容認性が高いのに対して、(1b)の容認性は低い。この容認性の低さは、バ命令条件構文の従属節述語には状態性述語のみが生起可能であるという制約があり、非状態性述語である「読む」を従属節述語として含むことに起因する。このような従属節述語に関する制約は、命令条件構文の接続助詞の位置に「タラ」が生起するタラ命令条件構文 (TARA imperative conditional construction) には見られない。</p> <p>(2) a. もし、食べたかったら、食べなさい。 b. 読んだら、ここに戻して下さい。</p> <p>しかし、バ命令条件構文に見られる語彙分布の制約は通時的に一貫したものではなく、非状態性の述語が生起した用例も過去には確認される。このことから、バ命令条件構文の従属節述語の制約は通時に形成されたことが窺われる。本研究では、バ命令条件構文の振る舞いを通時に検討し、現代日本語におけるバ命令条件構文の振る舞いがいかに形成されたかという点について検討を行う。また、現代日本語において類似した機能を示すタラ命令条件構文とバ命令条件構文の振る舞いを比較することを通して各構文の記述を精緻化するとともに、命令形述語を後件に含む命令条件構文が示す機能的侧面についても検討を試みる。</p> <p>第1章では、条件表現および命令条件構文について概観し、本研究の目的と構成を述べる。</p> <p>第2章では、本研究の枠組みとなる認知的構文文法について概観するとともに、命令条件構文の前件述語と後件述語において特徴的な語彙を特定するための手法であるコロストラクション分析 (collostruction analysis) (Stefanowitsch and Gries 2003, Gries and Stefanowitsch 2004, Stefanowitsch and Gries 2005)、現代日本語におけるバ・タラ命令条件構文の前件述語と後件述語において特徴的な語彙間に見られる意味の一般化を行うための手法として単語埋め込みモデル (word embedding model) を提示する。続いて、命令条件構文における言語変化が生じた時期を区分するための手法としてvariability-based neighboring clustering (VNC) (Gries 2012) を示す。</p> <p>第3章では、バ・タラ条件構文に関する先行研究をとり上げ、バ命令条件構文の振る舞いを検討するにあたっては、従属節述語の語彙に焦点を当て、通時的な観点から検討を行うことの重要性を提示する。</p> <p>第4章から第6章では、バ命令条件構文およびタラ命令条件構文を共時的および通時的観点から検討する。まず、第4章では現代日本語のバ命令条件構文における前件と後件述語の意味的特徴に焦点を当て、それぞれの述語が示す意味と、それらの意味を示す述語の共起パターンからバ命令条件構文の意味・機能的特徴を特定する。ここでは、simple collexeme analysis (Stefanowitsch and Gries 2003) により、バ命令条件構文の前件・後件における特徴的な語彙を特定し、単語埋め込みモデルの一つであるchiVe (真鍋他 2019) から対応する語彙ベクトルを抽出、ベクトルの次</p>	

元圧縮、クラスタリング分析という過程を経て、それぞれの特徴的な語彙の意味分類を行った。その結果として、バ命令条件構文の前件述語では「完了」「肯定的性質」「存在」「否定」「能力」、後件述語では「移動」「物体移動」「物体操作」の意味が特徴的であることが示された。そのうち、「物体移動」の意味を示す「下サル」は最も特徴的な語彙であるものの、「Vテ下サイ」という依頼構文における発話者への敬意を示す要素として機能し、後件で要求される具体的な行為の特徴的意味を特定するには、Vの位置に生起する語彙を検討する必要があることが明らかとなった。これを踏まえて、Vの位置に生起する語彙を検討した結果、「物体操作」「コミュニケーション」「接着/脱着」「知覚・認知」の意味が特徴的であり、その中でも情報提供を求める「コミュニケーション」の意味が最も際立って観察されることが確認された。続いて、「...SLOT1バ ...SLOT2テ下サイ」という形式をとるバ命令条件構文の用例を対象としてSLOT1とSLOT2の位置に共起する特徴的なパターンを特定するためにcovarying collexeme analysis (Stefanowitsch & Gries 2005) により分析を実施した。その結果、SLOT1-SLOT2の意味的共起関係として、(i) 「存在—コミュニケーション」、(ii) 「存在—停止」、(iii) 「肯定的性質—コミュニケーション」の特徴的な意味パターンが確認された。また、(i) のパターンでは発話者が必要としている情報を入手するために、手がかりとなる情報源に接近するための方略、(iii) のパターンでは、情報提供を依頼するという行為におけるポライトネスへの配慮といった発話者の知識が反映されていることが提案された。

第5章では、バ命令条件構文と同様の手法を用いて、タラ命令条件構文の前件と後件におけるスロットに生じる語彙の意味的特徴を分析した。その結果、前件においては「感情」「肯定的性質」「移動」「知覚」「到達」「存在」「ポライトネス」「過程的アスペクト」を示す語彙が特徴的であることが示された。それに対して後件では、バ命令条件構文と同じく「下サル」が最も特徴的な語彙であり、聞き手への依頼を行うにあたっての配慮が示されていることが明らかとなった。そのような配慮を表明した上で依頼される動作を示す語彙の意味は、「停止」「コミュニケーション」「認知的動作」「知覚」「接着」「授受」「一般的動作」「一般的動作使役」「ポライトネス」「移動」に分類される。また、特徴的な意味的共起関係は(i) 「ポライトネス—訪問」、(ii) 「存在—情報提供」、(iii) 「認知的動作・知覚—一般的な行為」に分類される。続いて、4章と5章で明らかとなったバ命令条件構文とタラ命令条件構文の前件と後件における特徴語と共に関係のうち、各構文に特徴的であるものをdistinctive collexeme analysis (Gries and Stefanowitsch 2004) を用いて検討した。その結果、両構文の前件述語に関する最も顕著な意味的差異は状態性の有無であり、バ命令条件構文では「状態」、タラ命令条件構文では「非状態」を示す語彙が特徴的であることが示された。また、タラ命令条件構文では「ポライトネス」を示す表現も特徴的に見られた。バ命令条件構文の前件における特徴語は「宜しい」「分かる」が特徴的であるがタラ命令条件構文と比較すると、前件における特徴語の種類はごく限定期である。このように前件述語の特徴語については両構文に大きな違いが見られたが、タラ命令条件構文の後件述語では「見る」「為る」「来る」、バ命令条件構文では「教える」が特徴語として特定され、その特徴語のタイプ頻度については大きな差が見られないことが明らかとなった。続いて前件と後件に生起する語彙の意味的共起関係としては、タラ命令条件構文では「ポライトネス」を示す条件と「訪問」「視覚」に関する依頼という共起関係が特徴的なものとして確認された。また、両構文で「存在」を示す条件と「情報提供」に関する依頼の意味的共起関係において各構文が存在の意味を示す場合、バ命令条件構文では無生物の存在を示す語彙、タラ命令条件構文では有生物の存在を示す語彙がそれぞれ特徴的であることが明らかになった。これらの結果は両構文は類似機能を示すが、同時に独自の機能を持つことを示唆し、上記の分析によって明らかとなった前件と後件の特徴語とその共起パターンは各条件構文の形式的スロットを占める要素として位置づけられることが提案された。

第6章は二つの事例研究から構成されており、全体として現代日本語におけるバ命令条件構文の制約が通時に生じた過程を考察している。第一の事例研究では十六、十七世紀のバ未然および已然条件構文の形式・意味的特徴を考察した結果、後件のムード・モダリティと前件述語の状態性が二つの構文の選択に影響する性質であり、ムード・モダリティの種類が顕著に条件構文の選択に影響を及ぼしていることが明らかとなった。バ命令条件構文の前件では状態性を示す語彙と命令・意志を示す形式が特徴的であり、バ已然条件構文では非状態性を示す語彙と必要性を示すモダリティ標識、もしくは、モダリティ標識を伴わない動詞・形容詞が顕著に見られる。このことから、バ未然条件構文は前件に表された条件が満たされた場合、動作主・聞き手が後件に示される事態を積極的に引き起こすことを意味の一部として含む一方で、バ已然条件構文は事態が自然展開することを示すという機能的な違いが提案された。両構文が示すこれらの意味的特徴は、バ命令条件構文の機能は典型的なバ条件構文から概念的に離れており、その結果、現代日本語において、バ命令条件構文は容認性が低いという先行研究の説明（浜崎 1999）を部分的に支持するものの、前件に状態述語が生起した場合は容認性の低下が生じないという点で説明の余地を残す。

上記の結果を踏まえて、第二の事例研究では(i) なぜ、バ已然命令条件構文は非状態述語を前件で示す機能拡張を

伴わなかったのか、(ii) バ已然命令条件構文はどのようにして後件で命令形を表現するようになったのか、という点について考察を行った。ここでは、現代日本語におけるバ命令条件構文の振る舞いは機能的に類似した構文の影響があったという仮定のもとに、バ未然命令条件構文、タラ命令条件構文、バ已然命令条件構文における前件の特徴的な語彙に着目し、その通時的变化について考察を行った。その結果、バ未然命令条件構文では前件に新しく出現する語彙の減少とバ未然命令条件構文の生起頻度が低下しており、バ未然命令条件構文の構文スキーマの影響が次第に低下したことが窺われた。前件では複数の意味に分類される状態述語と非状態述語が特徴語として生起し、非状態述語が前件に生起する場合には、前件で示される条件と後件で依頼される行為の時間的連続性に関して曖昧性が存在することが示された。タラ命令条件構文の場合、前件では非状態述語の出現が顕著だが、通時に状態述語も生起したことから通時的な条件構文としての機能拡張が窺われた。タラ命令条件構文では非状態述語が前件に生じた場合、前件と後件は連続的な時間関係を保証し、バ命令条件構文における時間関係の曖昧性が認められない。バ已然命令条件構文の頻度は限定的だが、前件では状態を示す語彙が特徴的に出現する。このような特徴からは、バ未然命令条件構文は前件に非状態述語が出現する場合、時間的関係性の曖昧性がコミュニケーション上を阻害する可能性があるため、そのような曖昧性を示さないタラ命令条件構文を連続的な時間関係を示すために用い、非連続的な時間関係を示すにはバ未然命令条件構文を使用したという構文の機能的な棲み分けを生じたことが示唆される。その結果、バ未然命令条件構文の前件における非状態述語の出現頻度は低下したと考えられる。このような事情から現代日本語にバ命令条件構文の前件述語制約が生じたと考えられるように一見思われるが、現代日本語で用いられるバ命令条件構文はバ已然命令条件構文であって、バ已然条件構文が後件に命令形述語を含むようになった過程を説明する必要がある。本研究では、この変化は書き言葉が話し言葉に近い形で表されるようになった言文一致の影響を受けている可能性を提示し、その結果、バ未然命令条件構文と同様に後件で命令を示す機能拡張が生じたと論じた。

第7章ではこれらの結果を踏まえ、共時的および通時的観点からバ命令条件構文の振る舞いを検討することによって、(i) 現代日本語におけるバ命令条件構文の詳細な意味的側面が明らかになったこと、(ii) 使用した分析手法が水平的構文関係および垂直的構文関係を特定するにあたって有益であること、(iii) 現代のバ命令条件構文の振る舞いが条件構文ネットワークにおける通時的な変化の結果であることを示した。また、見出された課題としては、本研究で使用した分析手法では多義語を区別しないため、分析結果を踏まえながらも個別の使用例を検討した考察の重要性、本研究の対象となったバ命令条件構文の周辺性ゆえの用例の少なさに関して、より多くの用例を検討することによって本考察結果を追試してゆくことの必要性が提示された。このような課題は認められるものの、それらの課題は上記のように克服可能なものであり、これまでのバ命令条件構文に関する考察では明らかとなっていた側面を明らかにしたという点において本研究の意義が主張される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (瀬戸 義隆)	
	(職)
論文審査担当者	氏 名
主査	教授 井元秀剛
副査	教授 三宅真紀
副査	准教授 小葉哲哉

論文審査の結果の要旨

瀬戸義隆氏の博士学位論文 *A study on BA Imperative Conditional Construction in Japanese* は、条件文の前件と後件が接続助詞に「バ」によって接続され、後件に命令形述語が生起する形式を示す構文を「バ命令条件構文」と名付け、その振る舞いを共時的および通時的に用法基盤構文文法の枠組みから検討したものである。出発点となったのは

- (1) *?読みば、ここに戻して下さい。
- (2) 読んだら、ここに戻して下さい。

のように、バ命令条件構文の従属節述語には状態性述語のみが生起可能であり、非状態性述語である「読む」を従属節述語とすることは許容されにくい、という制約である。この制約は通時的に一貫したものではなく、非状態性の述語が生起した用例も過去には確認されている。このことから、バ命令条件構文の従属節述語の制約は通時的に形成されたことが窺われ、バ命令条件構文の振る舞いを通時的に検討し、現代日本語におけるバ命令条件構文の振る舞いがいかに形成されたかという点について検討を行うとともに、現代日本語において類似した機能を示すタラ命令条件構文とバ命令条件構文の振る舞いを比較することを通して各構文の記述を精緻化し、命令形述語を後件に含む命令条件構文が示す機能的側面についても明らかにすることを論文の目的としている。本論文は8章より構成されており、各章の概要を以下の通りである。

第1章では、条件表現および命令条件構文について概観し、本研究の目的と構成を述べる。

第2章では、本研究の枠組みとなる認知的構文文法について概観するとともに、分析手法としてコロストラクション分析 (collostruction analysis)、単語埋め込みモデル (word embedding model) さらにvariability-based neighboring clustering (VNC) (Gries 2012) を示す。

第3章では、バ・タラ条件構文に関する先行研究をとり上げ、バ命令条件構文の振る舞いを検討するにあたっては、従属節述語の語彙に焦点を当て、通時的な観点から検討を行うことの重要性を提示する。

第4章から第6章では、バ命令条件構文およびタラ命令条件構文を共時的および通時の観点からの検討である。

第4章では現代日本語のバ命令条件構文における前件と後件述語の意味的特徴に焦点を当て、それぞれの述語が示す意味と、それらの意味を示す述語の共起パターンからバ命令条件構文の意味・機能的特徴を特定するものである。「... SLOT1バ ... SLOT2テ下サイ」という形式をとるバ命令条件構文の用例を対象としてSLOT1とSLOT2の位置に共起する特徴的なパターンをcovarying collexeme analysis (Stefanowitsch & Gries 2005)など用いて分析した結果、SLOT1-SLOT2の意味的共起関係として、(i)「存在—コミュニケーション」、(ii)「存在—停止」、(iii)「肯定的性質—コミュニケーション」の特徴的な意味パターンが確認された。また、(i) のパターンでは発話者が必要としている情報を入手するために、手がかりとなる情報源に接近するための方略、(iii) のパターンでは、情報提供を依頼するという行為におけるポライトネスへの配慮といった発話者の知識が反映されていることを提案する。

第5章では、バ命令条件構文と同様の手法を用いて、タラ命令条件構文の前件と後件におけるスロットに生じる語彙の意味的特徴の分析と二つの命令構文の比較である。タラ命令構文の特徴的な意味的共起関係は (i) 「ポライトネス訪問」、(ii) 「存在—情報提供」、(iii) 「認知的動作・知覚—一般的な行為」に分類されること、両構文の前件述語に関する最も顕著な意味的差異は状態性の有無であり、バ命令条件構文では「状態」、タラ命令条件構文では「非状態」を示す語彙が特徴的であること、各構文が存在の意味を示す場合、バ命令条件構文では無生物の存在を示す語彙、タラ命令条件構文では有生物の存在を示す語彙がそれぞれ特徴的であることをあきらかにし、両構文

は類似機能を示すが、同時に独自の機能を持つことを示唆している。

第6章は二つの事例研究から構成されており、全体として現代日本語におけるバ命令条件構文の制約が通時に生じた過程を考察している。第一の事例研究では十六、十七世紀のバ未然および已然条件構文の形式・意味的特徴を観察したもので、バ命令条件構文の前件では状態性を示す語彙と命令・意志を示す形式が特徴的であり、バ已然条件構文では非状態性を示す語彙と必要性を示すモダリティ標識、もしくは、モダリティ標識を伴わない動詞・形容詞が顕著に見られるとしている。第二の事例研究では(i)なぜ、バ已然命令条件構文は非状態述語を前件で示す機能拡張を伴わなかつたのか、(ii)バ已然命令条件構文はどのようにして後件で命令形を表現するようになったのか、という点についての考察である。通時的变化について考察を行った結果、バ未然命令条件構文では前件に新しく出現する語彙の減少とバ未然命令条件構文の生起頻度が低下しており、バ未然命令条件構文の構文スキーマの影響が次第に低下したことが窺われるのに対し、タラ命令条件構文の場合、前件では非状態述語の出現が顕著だが、通時に状態述語も生起したことから条件構文としての機能拡張が窺われ、非状態述語が前件に生じた場合、前件と後件は連続的な時間関係を保証し、バ命令条件構文における時間関係の曖昧性が認められないとする。ここからバ未然命令条件構文は前件に非状態述語が出現する場合、時間的関係性の曖昧性がコミュニケーション上を阻害する可能性があるため、そのような曖昧性を示さないタラ命令条件構文を連続的な時間関係を示すために用い、非連続的な時間関係を示すにはバ未然命令条件構文を使用したという構文の機能的な棲み分けを生じたことで、バ未然命令条件構文の前件における非状態述語の出現頻度は低下したと推測している。さらにこのような事情から言文一致の影響を受けてバ已然条件構文が後件に命令形述語を含むようになった過程を経た後、現代日本語にバ命令条件構文の前件述語制約が生じたという結論を導いている。

第7章ではこれらの結果を踏まえ、共時的および通時的観点からバ命令条件構文の振る舞いを検討することによって、(i)現代日本語におけるバ命令条件構文の詳細な意味的側面が明らかになったこと、(ii)使用した分析手法が水平的構文関係および垂直的構文関係を特定するにあたって有益であること、(iii)現代のバ命令条件構文の振る舞いが条件構文ネットワークにおける通時的な変化の結果であることを示した、と論文全体をまとめている。

以上のように、瀬戸氏は、バ命令条件構文という周辺的にすぎないとはいへ、通時的および共時的な膨大なデータを扱って、数量的に意味的特徴を調査し、客観的なデータを集め、170ページにわたる論文にまとめている。それによってこれまで明らかにされなかった構文の意味的な偏りが明らかになり、コロケーションなどと呼べるような類型が現れることを示した労作と評価することができる。さらに、先行研究での一般的な見解に反し、実際には、バ命令条件構文の前件に非状態述語も少数ではあるが生起しうることを示した点は特筆に値する。一方で、審査においては次のような批判や指摘がなされた。まず、ここでとられたコーパス言語学的分析手法が従来の研究方法と比べてどのような利点があるのか、ということに対して、単に構文と述語の結びつきが強い用法のパターンを調べてそれを提示した以上の内容ではなく、その結果をふまえて従来の研究以上に、条件構文全体の本質にせまる議論にはなっておらず不十分である。また現代日本語のバ・タラ命令条件構文の前件の意味分類においては、現代日本語書き言葉均衡コーパスの共起関係に基づいて特徴語彙を特定しているものの、単語の埋め込みモデルを利用したクラスター分析の結果と、特徴的意味要素の対応関係が明確に示していない部分があった。第6章では、正規化による頻度数調整を行っているが、一定の年数で区切っていないこともあり、適切な調整ができていないといった問題点が指摘された。さらに、出発点となったバ命令条件文について非状態性述語を前件にとることができない、という現象について、現代語でも可能な例が存在するのに、それがなぜ可能であり、どのような条件が加われば可能になるのか、という考察は全くなされておらず、通時的な分析にあたっても「かしこより人おこせば、これをやれ（伊勢物語）p.139」のように古語にみられた非状態性述語はどの位の割合で古語には出現し、それがいつからどのように減っていくタラ条件文にとってかわるようになったのか、という客観的なデータは示していない。「バ条件命令文における時間的関係の曖昧性がコミュニケーションの齟齬を起こすことを避けるためにタラ条件文が発達しバ条件文と棲み分けた」という主張がなされるが、現代語ではバ条件文とナラ条件文での棲み分けがなされている事実を考えると、根拠がかなり希薄であるため、棲み分けられた後の非時間的関係を示すバ条件文のデータを示すなど、説得力を高めるための検証がさらに必要である。

しかしながら、本論文は個別の使用例を用いて、これまで明らかになっていなかつたバ命令条件文の意味的なパターンを客観的なデータとして示しており、この構文に対する新しい研究手法を提案したということで、条件構文全体の研究に少ながらぬ貢献をしていることは間違いない、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。